親水公園の景観について

近畿大学大学院　学生員○西村典彦
近畿大学理工学部　正　員　三星昭宏
近畿大学理工学部　正　員　高石博之

1．はじめに　親水公園は、水枯れした河川を復活させたものやニュータウン等に新たに河川を設けたものなどがある。自然の少ない都市の中で「水」と「緑」を多く取り入れ、それらは自然に近い状態を再現しようとしているものである。したがって、景観面での工夫も当然なされている。これらを自然の河川と比較し、また、被験者によって同じ景観に対する評価がどう変化するかを探り、アンケートによる意識調査と合わせて考察する。

2．分析方法　河川周辺住民の親水意識に対する調査として、まず、旧淀川を対象とするアンケート調査を行った。次に親水公園に対するアンケート調査を行った。どちらも周辺住民に直接アンケート用紙を配布し、後日回収した。一方で写真による景観の分析を行った。分析には、南港、今川、十三間川の 3地区の親水公園、大和川、堂島川・土佐堀川の３種類の河川の写真を各々10種類用いた。被験者は土木工学科の学生と教員として、各河川ごとに一対比較してもらい、よいと感じた方に 1点を与え、その合計を写真の得点とした。そして、学生と教員の得点を比較した。次にそれらの写真を 5× 6メッシュに分割し、 1メッシュを10単位として目測でそこに含まれる要素の面積を測定し（表－ 1は各々10枚の平均）、得点と面積との相関を求め、好まれる景観と要素との関係を分析した。

表－1　写真に含まれる各要素の面積

	水	緑	空	建物	橋	地面	岩	護岸	木	他
親水公園	61.6	95.3	14.1	4.3	7.8	38.8	43.6	1.1	12.2	21.2
大和川	52.4	120.1	84.0	4.7	4.7	7.3	9.8	11.5	0.0	4.1
堂島川	97.5	35.3	74.1	46.4	14.9	1.6	1.8	17.5	1.0	10.0

3．河川の景観評価について　アンケートによる意識調査では過半数が河川を「汚い」と感じ、それを「水」によって感じているという調査結果を得た。「水」によって「きれい」か「汚い」かを判断した回答者が 7割近くおり、かなり「水」を意識していることが分かる（表－ 2、 3）。写真による景観の分析からは、堂島川・土佐堀川の写真には建物が多く含まれ、得点との相関は、-0.800で負の相関が大きかった（表－ 4）。「緑」は、得点との相関は高かったが、意識調査でかなり意識されていた「水」についてはほとんど相関は認められなかった。また、図－ 1に示す親水公園の場合と同様に学生と教員の河川景観の評価は差は見られない。

4．親水公園の景観評価について　南港でのアンケート調査では「水が汚い」という回答が 45.6%と多かった。都市河川の景観と同様に「水」は意識の上で高いウエイトを占めている。写真による景観の分析では、評価と構成要素の相関係数は-0.308～ 0.371で特に高い相関を示すものはなかったが、中でも高い相関を示すものは、河川と同じく「緑」であった。「水」については親水公園においても得点との相関は認められなかった。学生と

Norihiko NISHIMURA, Akihiro MIHOSHI, Hiroyuki TAKAISHI

表－2　旧淀川に対する印象

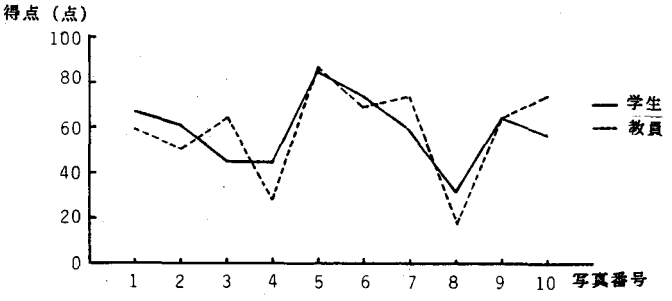
地　区	きれい 人(%)	きたない 人(%)	判断しがたい 人(%)	全　体 人(%)
長柄東	4 (4.7)	50 (58.8)	31 (36.5)	85 (100.0)
善源寺	14 (16.5)	36 (42.3)	35 (42.1)	85 (100.0)
天　満	11 (12.8)	56 (65.1)	19 (22.1)	86 (100.0)
中野町	9 (10.3)	46 (52.9)	32 (36.8)	87 (100.0)
合　計	38 (13.2)	117 (53.5)	188 (33.3)	341 (100.0)

表－3 “きれい”または“きたない”と判断した対象物

地　区	水 人(%)	川　岸 人(%)	河川敷 人(%)	景　色 人(%)	緑 人(%)	わからない 人(%)	その他 人(%)	合　計 人(%)
長柄東	39 (66.0)	1 (1.7)	6 (10.2)	3 (5.1)	0 (0.0)	2 (3.4)	8 (13.6)	59 (100.0)
善源寺	34 (66.7)	3 (5.9)	4 (7.8)	2 (4.0)	4 (7.8)	0 (0.0)	4 (7.8)	51 (100.0)
天　満	51 (76.0)	1 (1.5)	1 (1.5)	6 (9.0)	4 (6.0)	1 (1.5)	3 (4.5)	67 (100.0)
中野町	37 (68.4)	3 (5.6)	3 (5.6)	4 (7.4)	1 (1.9)	0 (0.0)	6 (11.1)	54 (100.0)
合　計	161 (69.6)	8 (3.5)	14 (6.1)	15 (6.5)	9 (3.9)	3 (1.3)	21 (9.1)	231 (100.0)

表－4　得点と各要素の面積との相関

	親水公園	大和川	堂島川
水	-0.236	0.231	-0.119
緑	0.371	0.429	0.658
空	0.297	-0.665	0.472
建物	-0.020	-0.295	-0.800
橋	0.174	0.115	-0.260
地面	-0.298	-0.610	0.541
岩	-0.053	0.308	0.404
護岸	-0.308	-0.075	-0.174
木	0.007	―――	0.569
他	-0.143	-0.024	-0.703



図－1　学生と教員の評価の比較（親水公園）

教員の評価にも差がないことが分かった（図－ 1）。

5．考察　旧淀川に対するアンケート調査では「水」により「きれい」か「汚い」かを判断していた。また、親水公園に対する調査でも「水が汚い」という回答が多く、「水」を意識した回答を得たが、写真からの分析では、「水」は得点との相関が低く、「水」と河川景観との関係は見出せなかった。中村は「意識野の移動と範囲の伸縮に応じて“図”－“地”関係は階層性をもって現れる」[1]としており、イメージとして河川を捉える場合は河川の中で最も重要な「水」が意識の中心にあり、“図”として捉えられ、視覚として捉える場合、河川の「水」は当り前な風景であり「水」は“地”となり、意識の中心はより特徴のある要素の方へ移動したのではないだろうか。あるいは、写真という静的な景観と動きを含めてイメージとして捉える場合では意識の中心が異なるとも考えられる。

最後に被験者による効果では、学生と教員という 2種類の被験者について同じ分析を行ったが、河川景観に対する評価はほとんど同じであるという結果を得た。河川景観という自然物に対する評価には個人差がそれほど出ないのではないかと思われる。したがって、今回の方法は、景観設計の際の評価法として簡単に用いることができる方法と考えられる。

6．あとがき　この研究を進めるにあたり助言いただいた近畿大学の川本教授、江藤教授に深く感謝する。

参考文献　1)中村良夫：風景学入門，中公新書
2)樋口忠彦：河川の好まれる場所についての研究，34回土木学会年講概要集